

B O O K

『H5N1 強毒性新型インフルエンザウイルス日本上陸のシナリオ』

国立感染症研究所研究員 岡田晴恵 著

モダンメディアの書評ということで、普通の本ではありません。今回の本は岡田晴恵女史の『H5N1』である。作者の岡田女史は近年インフルエンザや麻疹の研究で日夜努力され、多大な貢献をされている国立感染研の研究者である。その人柄はあくまでも謙虚であるにもかかわらず、インフルエンザに関する熱意はただならぬものをもっている御仁である。

今回の女史の作品は『H5N1』に加えて、『強毒性新型インフルエンザウイルス日本上陸のシナリオ』という副題名がついている。この副題名がないと、この小説はSF小説と間違えられてしまうほどのきれいな真っ黒な体裁のカバーである。読み進めると小説風にストーリーは進んでいき、SFとしてベストセラーとなった日本沈没と同様のあるいはエボラ出血熱の映画のようにつつい引き込まれてしまう内容である。岡田女史の数々ある書物は、いくつかすでに読ませていただいているが、他のものは学術的要素の強い書が多い。一方、この本は強毒性新型インフルエンザウイルスが日本上陸したときの架空のシナリオである。登場人物が名前を変えてあっても、実際に同様なポジションの方の顔が思い浮かんでしまうほどのリアリティーがあるシュミレーションストーリーである。著者の本邦における新型インフルエンザ対策における願いが文章のなかの随所にかいま見え、岡田女史の思いや、悲壮感が漂うほどの決意を感じる。また、福岡から1号が発生するところでは、福岡弁での文章がさすがしく読みやすい雰囲気となっている。感染症に立ち向かう医師や微生物学者、研究者、検疫担当官などの奮闘があますことなく表現されていて、読み終わった後に、「ふう」とため息が出てしまうほどの臨場感がある。

インフルエンザがヒトに感染し、伝染力の強い強毒株に変わりうるのか、鳥での死亡率がこれほどまでに高いことを考えると、ヒトへの感染性を得た後は、ヒト対ウイルスの激しい戦いがおこるのは必至であると感じさせる。インフルエンザとヒトとの戦いは古くからあり、国内外の書物に流行の記録が残っている。現在のアジア、欧州での鳥インフルエンザがヒト→ヒト感染の能力と強毒性を得たとき、現代の交通網により1-2週間で世界中に伝播、そして大流行パンデミックとなることを考えると背筋が寒くなる思いである。スペイン風邪の時代とは異なり、医療のサポート治療は発達しているし、ワクチンや抗ウイルス薬もあるので、けっして簡単にはヒトは負けないのではと期待をしつつ、このような恐怖のシナリオが現実にならないことを祈りながらこの書評を終える。

東京医科大学小児科
河島 尚志

発行：ダイヤモンド社 発行日：2007年9月 定価：1,680円（税込）